



刀根 健

株式会社ヒューマンスキル開発センター
講師／コンサルタント

Takeshi_TONE 1989年東京電機大学理工学部産業機械工学科を卒業，大手商社に営業職として入社。営業職としてコミュニケーションやカウンセリングスキルの必要性を感じ，産業カウンセラーを取得。教育・研修を中心とした業務に専念するため，社会人教育研修企業へ転職。心理カウンセリングとキャリアカウンセリングを統合した独自のカウンセリングの資格取得コースの開発を担当。人事部門に転属し，教育・研修・制度を担当。人事制度の改革や風土改革などのコンサルティングも得意とする。同社を退職し株式会社ヒューマンスキル開発センターへコンサルタント，講師として入社，現在に至る。産業カウンセラー，セルフリング・サポート・カウンセラー（ベーシック），TAインストラクター（上級）の資格を所持。主な著書に『ストローク・ライフのすすめ』（フォーメクス出版）がある。

おとなしく従順で真面目 「順応の子ども（AC／Adapted Child）」

本連載では，TA理論における6つのパーソナリティ分析を基に，それぞれの性格的な特徴が起こし得るリスクの可能性をストーリーでまとめてみました。今回は，「順応の子ども（AC／Adapted Child）」の高い山岡看護師のケースです。

1

「あの…山岡さんがお話ししたいことがあるって…」

そう，それはちょうど日勤から準夜勤の交代の時間帯のことだった。看護部のミーティングを終えてナースステーションに戻ってきた鈴木師長を，ベテランの池田看護師が呼び止めた。

「山岡さんが…？」

「はい…」

池田看護師はちょっと意味ありげに鈴木師長をチラリと見ると，口を開いた。

「先週のインシデントの…」

「ああ…あれね」

「山岡さん，あれからとっても元気なくって」

「ええ，分かったわ。話，聞いてみるわね」

「よろしくお願いします」

池田看護師はナースステーションの隅っこに小さく座っている山岡看護師に一瞬，心配そうな視線を投げかけ，ナースステーションから出て行った。鈴木師長はうつむいて小さくなっている山岡看護師に近づいていった。

「山岡さん，お疲れ様」

「あ…はい…」

山岡看護師は一瞬ビクッと身体を緊張させて鈴木師長を振り返ると，慌てて返事をした。

「毎日毎日，本当によくやってくれて感謝してるわ。ありがとうね」

「あ…はい…いえ…」

「どうしたの？ 私でよかったら話してくれる？」

「あ…はい，すいません」

「別に謝らなくてもいいのよ。これも私の仕事のうちだしね」

鈴木師長は安心させるようにやさしく微笑んだ。

「あの…私…」

山岡看護師がおずおずと口を開いた。鈴木師長はやさしげな視線を山岡看護師に投げかけ，言葉を待った。

「私…この仕事向いていないんじゃないかって…」

そこまで言うと，山岡看護師の目から涙がぼろぼろと流れはじめた。鈴木師長は近くにあったティッシュペーパーを数枚取って，山岡看護師に渡した。山岡看護師は嗚咽をこらえながらティッシュを顔に押し当て，しばらくうつむいたまま身体を震わせていた。鈴木師長は，山岡看護師が少し落ち着いてきたことを見計らって声をかけた。

「そう…山岡さん，そんなことを感じてたんだね…。話してくれてありがとうね」

「はい…いえ…」

山岡看護師は小さな声で答えた。

「山岡さんはどうしてそう思ったの？ もしよかったら，もうちょっと詳しく教えてくれ

る？」

「あ…はい…」

山岡看護師はそう言うと言ったが、鈴木師長は山岡看護師の言葉を待った。しばらくすると、山岡看護師がおずおずと口を開いた。

「私…先週、点滴の滴下調整を間違えてしまって…」

「ああ、あれね…」

そう、それはちょうど1週間前の出来事だった。山岡看護師は担当している心疾患のある患者に、点滴の滴下調整のミスをしてしまったのだ。本来の時間よりも早く多量の輸液を入れてしまったことで、患者が胸を苦しみ出してしまったのだった。幸い、その後の投薬で症状は治まり心不全には至らなかった。普段から山岡看護師の対応がよかったためクレームにはならなかったが、医師から「患者を

殺す気か？」と強く指摘されてしまった。鈴木師長は当日、山岡看護師のインシデントレポートでその出来事を知ったのだった。

「私…あれから仕事をするのが怖くなって…」

山岡看護師はうつむいて、小さな声で言った。

「怖くなった…というത്？」

「はい…また、ミスをしてしまうんじゃないかって…」

「そうなんだ…」

「そうしたら、一つひとつの作業にすごく時間がかかるようになってしまって…」

「うん、うん、それで？」

「それで…時間が押してしまって…ほかの人たちにもすごく迷惑をかけちゃって…」

山岡看護師はそこまで言うのと、またがっくりとうつむいて黙った。鈴木師長はしばらく様子を見て、やさしく口を

開いた。

「山岡さんはみんなに迷惑をかけちゃったって思ってるんだね」

「…はい…」

「そうなんだ…それで？」

「あ…はい、あの、私、やっぱり、この仕事向いていないんじゃないかって…」

「そっか…自信、なくなっちゃったんだ…」

「はい…」

山岡看護師がうつむきながら、コックリとうなずいた。
「そう…山岡さん、大変だったね…」

鈴木師長は立ち上がって山岡看護師の背中をやさしくさすった。山岡看護師は再びティッシュを顔に押し付けると、身体を震わせて鳴咽しはじめた。鈴木師長は山岡看護師の鳴咽が治まるまで背中をさすった。

2

「すいません…」

鳴咽が治まると、山岡看護師は少し顔を上げて鈴木師長に謝った。

「いいのよ。山岡さんが経験したことはね、誰でもみんな一度は経験することなんだから」

鈴木師長はそう言うのと、山岡看護師の斜め横のいすに座った。

「山岡さん、私が思っていること、話しても大丈夫？」

「あ…はい、大丈夫です」

少し落ち着きを取り戻した山岡看護師が静かにうなずいた。

「今の山岡さんの話はね、2つポイントがあると思うの」

「2つ…ですか？」

「そう、2つ」

「…はい」

山岡看護師は真剣な表情で鈴木師長を見つめた。

「一つはね、点滴の滴下調整

のミスってことね」

「…はい」

「確かに、これはやってはいけないミスよね。でも、私たち看護師も人間だから、どんなに注意していてもミスをしてしまうことはあるわ。私たち、ロボットじゃないでしょう？」

「はい…」

「だからね、大切なことは、まず自分自身がミスをしないよ

うな手順を自分でしっかりつくるといことね」
「……」
「まずは点滴を行う際はしっかりと計算をする習慣をつけること。メモ帳に計算表を書いておくとか…。これはもう間違わないわよね」
「はい…あれから何度も計算し直してます…でも、ちゃんとできているか自信がなくなってます…」
「そうね…それじゃあ、1時間に1回は確認する癖をつける、とかね」
「確認…ですか」
「そう、例えばほかの人のところへ行った時に、さっと確認して回るとかね」
「あ…」
山岡看護師は初めて気づいたように顔を上げた。
「そうすれば、不安も少なくなるでしょう？」
「あ、はい…なるほど、です」
「それから、あとはダブルチェックね」
「ダブルチェック…」
「あれから池田さんがよく一緒に回ってくれているでしょう？」
「あ、はい…」
「2人でチェックすれば、ああいったミスは防げると思うの。違うかしら？」
「あ、はい、そうです」
「実際、あれからミスしてないでしょ」

「あ…はい、そうなんですけど…」
山岡看護師はそう言うと、また目線を下げた。
「どうしたの？」
「あ、はい…。でも、池田さんやほかの人たちに悪くって…。私のせいで、ただでさえ忙しいのに、負担をかけちゃって…」
山岡看護師はうつむいたまま、途切れるような声を出した。
「そこが2つ目のポイントのところね」
「2つ目の…？」
山岡看護師が目を上げた。
「そう、2つ目のポイント。それは気持ちね」
「気持ち？」
山岡看護師が聞き返した。
「そう、気持ち。山岡さんはね、とっても真面目で一生懸命コツコツできる人だし、周りの人たちともとても協調できる人なの」
「あ…いえ…」
「人はね、よいところとよくないところが裏表になって一人の人になってるのよ。どっちか一つの面だけでできている人はいないの」
「……」
「山岡さん、私はね、あなたよりもっと自分自身の価値を自分で認めてあげる方がいいと思うの」
「でも…みんなに比べて、私、

全然できていないし…」
「そうかしら。できていることもいっぱいあるじゃない」
鈴木師長が明るく言った。
山岡看護師は意外そうに鈴木師長の言葉に顔を上げた。
「山岡さんはとっても気遣いができる人なの。そして、人が嫌がるやりたくないような仕事でも、嫌な顔一つせずに真面目に一生懸命できる人なの」
「そんなこと…ないです」
「私たち看護師もね、いろいろな人がいるでしょ。ほら、考えてみて。浅田さんみたいに元気があるけどマイペースな人とか、定岡さんみたいにきっちりしてるけど、ちょっと融通がきかない人。ほかにも杉田さんみたいに仕事は完璧だけど、ちょっととっつきにくい人。いろいろな人がいるのよ、分かる？」
「はい…分かります」
「みんなそれぞれよいところと、そうじゃないところを持っているの。山岡さん、あなたもそうよ」
「私も？」
「そう。あなたのよいところはさっきから何度も言っているように、とってもよく気遣いできる真面目なところ。よくないところはね、気を遣いすぎて自分を責めちゃうところかな」
「自分を…責める…」
「そう。誰も山岡さんのこと

を迷惑だなんて思ってる人は
いないわ。もちろん、私もよ」
「……」

山岡看護師は自信なさそう
に上目遣いで鈴木師長を見た。
「人はみんな、支えられなが
ら一人前になるの。私たち看
護師もそう」

鈴木師長は山岡看護師と視
線を合わせた。

「山岡さん、今ここから逃げ
出したら、また同じような出
来事が起こった時、また逃げ
たくなっちゃうと思うの。自
分から逃げたらだめよ。乗り
越えるのよ」

「逃げない…乗り越える…」

「そう、乗り越えるの。**“失敗
を経験に変える”** のよ」

「失敗を…経験に…」

「失敗は誰にでも起こるわ。
それを忘れずに覚えていて、
いつまでも思い出しながらク
ヨクヨするのはね、**“失敗を
苦しみに変える”** と言うの」

「失敗を…苦しみ…」

「失敗には原因があるでしょ。
だからその原因をしっかりと
分析して、同じ失敗をしない
ようにすればいいわけ。それ
が**“失敗を経験に変える”** っ

てこと。だからね、この考え
方でいくと**“人生には失敗は
ない。すべてが経験”** ってこ
とになるのよ」

「人生に失敗は、ない…」

山岡看護師は同じ言葉を繰
り返した。

「そう、失敗はないのよ。私
もこの言葉にはいっぱい励ま
されたわ。私なんてね、もう、
すごかったんだから。自慢
じゃないけど」

鈴木師長はちょっといたず
らっぽくニッコリと笑った。
山岡看護師の顔にちょっと柔
らかさが戻ってきた。

「山岡さん、あなたは今回の
インシデントでいっぱい経験
したわよね」

「はい…」

「それはね、今はつらいかも
しれないけど、自分にとって
の宝物なのよ」

「宝物？」

「そう。宝物。経験をいっぱ
いすること。そして、それを
糧に成長すること。これがね、
私たち看護師、いえ、私たち
人間の生きていく道じゃない
かって思うの」

山岡看護師の真剣な目を

真っ直ぐ見つめながら、鈴木
師長が言葉を続けた。

「人はね、成長するために生
まれてきたんじゃないかって
思うのよ、私はね」

「成長するために…」

「だからね、いっぱい経験す
ることは大切なことなのよ」

「はい…」

「大丈夫、あなたならできる
わ。安心して。私たちみんな
で支えるから」

「はい」

山岡看護師はコックリとう
なずいた。

「それであなたが十分に成長
したら、今度はあなたがみん
なを支えてあげるのよ。これ
はね、順番なんだからね」

鈴木師長はニコッと笑った。

山岡看護師もつられて微笑ん
だ。

「師長、ありがとうございました」

山岡看護師は頭を下げてナース
ステーションを出ていった。
鈴木師長はその背中を見つめ
ながら思った。

「あの子、きっと、人の気持
ちの分かるいい看護師になる
わ」

解説

解説AC(Adapted Child／順応の子ども)の高い人の特徴は、おとなしく従順で真面目。周囲の人たちの気持ちに合わせながらコツコツと我慢強く仕事をこなすことができます。業務では相手の気持ちをいち早く察して、言われなくてもそれに合わせて行動することが得意です。ですので、相手からは“よく気がつく”“一緒にいてラク”と評価され、対人関係で衝突することはまずありません。しかし、この特徴がネガティブに現れると、周囲を気にしすぎて身動きが取れなくなり、自信をなくし、自分を責めてしまいます。つまり“勝手に気にして、勝手に疲れて、勝

手に落ち込む” のです。

したがって、今回の鈴木師長の対応のように、相手の気持ちをよく聞き、受け取り、そして支えていくということをしっかりと本人に伝えることは重要です。自信を失いやすい反面、とてもよく気がつき、真面目で我慢強い性格なので、一人前になるまで少々手間取るかもしれませんが、自信をつけ経験を積めば、相手の気持ちをよく理解できる優秀なスタッフになることでしょう。

あなたは
どのタイプ？

今回の山岡看護師はAC (Adapted Child／順応の子ども) タイプでした。あなたはどのタイプでしょう？ エゴグラムによる無料自己チェックのアドレスはこちら。
<http://www.human-skill.co.jp/TPS/checklist.html>